

国 語

注 意

1. 問題は全部で15ページである。
2. 解答用紙に氏名を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
5. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が1のとき)

1	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり、折り曲げたりしないこと。

— 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 問 に 答 え よ 。

感性とは、世界の状況やそこにある対象の性質を知覚しつつ、わたしのなかでその反響を聴くはたらきである。言い換えれば、世界とわれをつなぐ回路のつなぎ目である。いかなるつなぎ方を好むかが、西洋的な世界認識と日本的な感性的世界経験とを分かつ。前者が **A** のに対して、日本的感性は直接の接触感を求める(あるいは、これは西洋と日本と言うよりも、知覚と感性的認識の違いだと言ってもよい。感性を問題とする限り、西洋人も接触感を求めるはずである。しかし、身につけているのがいずれの態度か、という点に違いが現れる)。バラ型に対するサクラ型の違いである。桜の花の観賞方式は、その美しい空間の広がりの中に入り、その空間に包まれることである。ここから、日本的感性のキチヨウ^aとして、触覚性ということを引き出すことができる。この場合の触覚性とは、皮膚を介して外なる世界を感ずるという元の意味だけでなく、対象や世界の像が心に粘着することも、また自然界の内部でもものとものが接触することも含む広い意味である。これを接触と言わず、あえて触覚的と言うのは、自然の接触現象でさえ、それが意味をもつのは、それに注目し、好んでそれに感応する感性あつてのことだからである。

触覚性は日本的感性の常数である。しかしこれに掛けあわされる変数があつてこそ、多彩な感性的現象が展開する。そのような変数としては、《世界—われ》の基軸のうえでの方向もしくは位置(より世界の側に位置するか、わたしのなかのことがらか)と、変化を引き起こす「動き」の二つを挙げることができる(便宜上、あえて名前をつけるなら、基軸変数、動性変数とも呼ぼう)。触覚的感性は、直ちに、基軸変数に従つて二方向に分化する。桜の花に包まれることは、明らかに世界の側に傾いた経験だが、ここに焼きついた残像に注目するときには、われに重点を置いている。世界型において、意識は、わたしを包む空間の広がりへと拡散するが、われ型の本領は、**B** に注意する意識である。意識を拡散させる空間は、大気(雰囲気)的である。日本の風景経験の原型は、ケシキとしての「けしき」にあり、視覚的ではなく触覚的である。中世になって、視覚的に遠景を捉えるようになると一種の遠近法的構図ができるが、われわれの感性は、身近なところに触覚的な近景の支えを必要とした。

他方、われ型の基本特性は、イメージや思いのころへの焼きつけ、もしくは粘着だが、この感性は記憶と相関し、記憶を豊饒ほうじょうなものにする。何よりもまず、こころに刻み込まれた残像を捉えるためには、のぞき込むべき記憶がなくてはならない。このような瞬間的な記憶から始まって、記憶の帯域レンジは日付のない遠い過去へとにじみつつ深化してゆく。感性的認識に固有の、わたしのなかへの反響は、しばしばこの深層から倍音を立ち上げる。そもそも何かが残存し、留められるというのは、物質、ひとで言えば身体／肉体に固有の現象である。そこに記憶の身体的、肉体的性格が窺うかがわれる。従って、身体的な記憶へのCとしての感性において嗅覚の占める重要な位置は、特に香を焼きしめる宮廷の慣習のなかに捉えることができる。男は橘たちばな女は梅の香を衣服に焼きしめた。それは恋愛の情景を記憶に残し、記憶を呼びさます際の葉しやのような役目のものとなる。そこには二重の残像、二重のDが織りなす繊細さの機構がある。嗅覚自体のDがあり、恋愛のDがある。その匂いは衣服に、ついで身体的記憶のなかに粘着し、あとに残る。衣服に染みだ残り香は、恋の記憶をよみがえらせるとともに、記憶としての身体を疼やかせる。

2 世界とわれをつなぎ、両面照射する性格は、残像の感性の多くに顕著である。記憶の残像に関わるものとしては、なつかしきがある。「なつかし」とは『馴れ+付いた』の意であり、生活のなかで親しんだものことである。「なつかし」と形容されるのは、例えば山吹の花の香のような、世界のなかのものやことがらだが、それをなつかしいものとしているのは、記憶に集積されたわたしの生活経験である。世界とわれのEは、「なごり」にも見られる。この語は、もと、「余波」と書かれ、海辺の砂に残された波紋を指していた。今では、名残と書いて、もっぱら愛惜あいしきの情の意味で使っている。ものからこころへの隠喩的な転移は、既に万葉期になされ、男を待っていた女の、身体に残された思い（不眠状態における空しい期待）のなかに「なごり」をみとめていた。

もう一つ、「おもかげ」「かげ」も忘れずにおきたい。おもかげとは、ひとの面ざしがこころに残した残像であり、イメージである。イメージが影と呼ばれるのは、「かげ」の原義が投影だからである。この語が「ひかり」であり、かつshadowであると、いう独特の意味構成をもっているのは、この原義に由来する。この投影は、投影の元にあるものと先にあるものとを、多少なり

とも同化する。橘の影はいかほどか橘であり、おもかげは幾分なりともそのひとそのものである。

ここに隠喩的交感が表現する。触覚的感性は、その基軸変数において、世界への方向を取る場合と、われへと内向する場合があるが、隠喩的交感において再び一つに重なり合う。それは、世界とわれのあいだにとどまらず、世界の内部においてもはたらく。橘の影がいかに橘、というのは既にその一例だが、「きよし」「さやけし」に典型的なすがたを見ることが出来る。きよし||さやかは日本の美意識を代表する概念の一つだが、その具体的な現象としては、月のひかりと水の流れ、瀬音が挙げられる。事実、これらを併記したうたも多く、きよいと聞いただけで、月のひかりや瀬音が想起されるほどに、強いつながりをもっている。すなわち、**F**。この天地照応の概念は、天体のめぐりと人事のめぐりに対応させる考えにおいて、更に明瞭な表現を見いだす。そこには中国思想の影が感じられるが、きよし||さやかの概念に照らしてみても、この世界表象が日本の伝統的ななかにあつたことは、間違いない。

(佐々木健二『日本的感性―触覚とずらしの構造―』による)

問一 空欄

A

に入る文として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答番号は **1**。

- ① 世界を神聖化し、そこに宗教的な価値を見出そうとする
- ② 世界に対して距離をとり、明晰判明な像を結ぼうとする
- ③ 世界を映像化し、鑑賞の対象として商品化しようとする
- ④ 世界を構造化し、そのあらゆる側面を科学的に分析可能な対象とみなそうとする
- ⑤ 世界から自己を独立させ、他者との日常的な接触を避けようとする

問二 二重傍線部 a「キチヨウ」を漢字に直した場合、「チヨウ」に当たる漢字として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 2。

- ① 重
- ② 帳
- ③ 長
- ④ 調
- ⑤ 徴

問三 空欄 B に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 3。

- ① 瞬間的
- ② 反省的
- ③ 批判的
- ④ 消極的
- ⑤ 受動的

問四 二重傍線部 b「ケシキ」を漢字に直した場合、「ケ」に当たる漢字として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 4。

- ① 気
- ② 華
- ③ 懸
- ④ 化
- ⑤ 仮

問五 傍線部 1「この深層」全体が指し示す語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 5。

- ① 瞬間的な記憶
- ② 記憶の帯域
- ③ 感性的認識

④ わたしのなかへの反響

⑤ 日付のない遠い過去

問六 空欄 C に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 6。

- ① 幻想
- ② 回帰
- ③ 反響
- ④ 憧憬
- ⑤ 遮断

問七 3つの空欄 D には同一の語句が入る。空欄 D に共通に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 7。

- ① 娯楽性
- ② 社会性
- ③ 知覚性
- ④ 官能性
- ⑤ 論理性

問八 傍線部2「世界とわれをつなぎ、両面照射する性格」とあるが、その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は8。

① 日本的感性の常数としての接触性が、皮膚を介した触覚を意味すると同時に、世界の像が心に粘着することを意味すること。

② 世界のものや事柄を描写することが、同時にそれらに対する自分の思いを表出することであること。

③ 中世以降の日本の風景描写においては、遠近法的な構図の中にも、触覚的な近景の支えが認められること。

④ 世界とわれのつなぎ方が西洋的な世界認識と日本的な感性的世界経験とに分かれること。

⑤ 西洋的感性においては、世界の側に傾いた経験が同時に主体の側に傾く場合があること。

問九 空欄 E に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は9。

① 反義性 ② 類義性 ③ 単義性 ④ 同義性 ⑤ 両義性

問十 二重傍線部c「愛惜」の読みとして、最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は10。

① あいしゅう ② あいしゃく ③ あいせき ④ あいそ ⑤ あいそく

問十一 傍線部3「この語」が指す語として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は11。

① かけ ② おもかけ ③ イメージ ④ 投影 ⑤ 残像

問十二 空欄 F に入る文として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は12。

① この美的概念において天地は対立しあい、隠喩的交感はその働きを失っている

② この美的概念において天地は照応しあい、隠喩的「交感」は「交換」の性格を強めている

③ この美的概念において天地は逆転し、隠喩的交感が両者の結びつきを深めている

④ この美的概念において月のひかりと瀬音は一つに溶け合い、隠喩的交感の度合いが強まっている

⑤ この美的概念において月のひかりと瀬音は独立した概念として捉えられ、隠喩的交感の度合いが弱まっている

二 一次の文章は港千尋『芸術回帰論』の一節である。文中の「この本」は『芸術回帰論』をさす。これを読んで、後の問に答えよ。

およそ言語をもっているならば、「文字とは何だろう」と言うことはできる。だがそれを書くことができるのは、書字法のある言語を理解し、かつ読み書き能力のある人に限られる。¹文字は二重の意味で限定的だ。すべての言語が文字を必要としたわけではない。その意味で文字は後発的でもある。書字法が中国からもたらされる以前の日本でもそうであった。

いま、日本語は文字を必要としたのだろうか、と考えてもおそらく答えは出ないだろうが、文章を書きながら、文字のない社会を考えることは可能である。それは無文字社会を対象にした民族学の成果にも明らかだ。では文字のない社会において、人は文章を書くことをどのように考えるだろうか。おそらくそれは、文字を生み出し使用する人間を考えることになるだろう。文字は、その使用と切り離すことができない。

デザインの学校なら第一目目に、それは視覚的伝達記号の一種であると習うが、書家の弟子になった初日にそんなことを言ったら、²先生に叱られるかもしれない。日本では、文字は絵である、³と言いつつ美術家もいる。彼にとって文字は記号ではなく、絵画とまったく同格の「作品」であって、伝達のための記号などではない。文字はその使用において、知性と感性の両方を必要とし、³それぞれの要求に応じて形態や意味を変える。文字は記号であると同時にイメージである。

いつぼうフォントデザインの会社にとって文字は記号である以前に、まず財貨である。ますます多くのフォントをデザインし、使用している日本のような社会では、文字は商品であると言っても決して過言ではない。文字には物質としての^A的な価値だけでなく、使用する際の^B的価値がある。

わたしは文字とは社会におけるもつとも基本的な物質―空間であり、それを生むのは知性と感性の^{*}インタラクションであると考え。文字は精神と物質、記憶と身ぶり、個と社会のあいだのインタラクションをおして生成するものである。タイポグラフィとは、そのようなインタラクションが、それぞれの時代に生み出した様式だと言えるだろう。

この本は日本語で書かれ、日本語で印刷されている。それは英語で書かれ、英語のアルファベット活字で印刷される場合とは

大きく異なる。文字を英語でタイプし、それをページ組みして印刷する立場から、日本語の文字を見た場合、そこにはどのような特徴があるだろうか。まず以下のような際立った違いがあることを確認しておこう。

1 日本語の表記体系は複雑だ。それは、異なる表記法の混在によって成り立っている。漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字の四種類で、それぞれは歴史的に異なる出自がある。ひらがなとカタカナは漢字の C から生まれたが、ローマ字の歴史とはまったく異なる。

2 日本語の文字セットには、アルファベットとは比較にならないほど多くの文字が含まれている。ただ数が多いというだけでなく、そこには明確な限界が存在しない。⁴

3 日本語文字の表記には、⁵ 普遍的な規格が存在しない。キーボードの入力方式や、符号化の様式についても、普遍的なルールが存在しない。

4 縦書きと横書きのふたつの配置法が存在している。

5 漢字使用の歴史は韓国やヴェトナムにもあるが、それらアジアの漢字圏のなかでも日本に特異な表記法として、ルビがある。

1と2についてはあらためて説明する必要はないだろう。それらの使用はどの水準まで含めるかによって変わってくるが、補助漢字や記号、アルファベットなどを含めれば、通常の印刷に必要な文字セットは一万字におよぶとする指摘もある。すべてのアルファベットに共通しているのは数が決まっているという点だが、漢字の世界にはそれがない。日常的な用法として決められているのは「水準」であり、時代と用途によつて、その数は増減している。日本で使用される漢字には中国起源の字だけでなく日本で作られた「国字」も多くあり、それが中国に逆輸入され使用されている。アルファベットに比較した場合の漢字世界の特徴のひとつは、時代を通じて新しい文字を作ってきたという事実にある。

使用条件による影響が明確に認められるのは4である。ワープロや携帯電話の使用頻度が高くなるにつれ、縦書きと横書きには変化が認められる。現代の日本人は書くのはますます横書きを好むようになってきているが、読むのはまだ縦書きのほうを好む。

たとえば大学のレポートや論文はほとんどが横書きであるが、日本で出版されている書物の大部分は依然として縦書きだ。

縦書きそのものは、漢字とともに中国から伝わったわけだが、物事を縦に見ることはそれとは別の歴史があるだろう。たとえば写真の世界でも、カメラを横位置に構えるのと縦では見方が違う。最近はそのほど言われなくなったが、横位置と縦位置の写真では、世界に対する態度が異なる。

ふたつの目が水平についている人間の視界は本来、横位置だ。カメラを縦にすると、視界の左右の端を切って中央を残すことになるから、縦位置とはそう構えること自体で選択的になる。もちろんファイナダーという窓それ自体が、世界を切り取っているのだから程度の差とも言えるが、このような横と縦との違いは生活のさまざまな局面で出会うものだろう。

新聞、雑誌、書籍と出版物が急速に電子化されつつあるが、位置という観点からすると面白い展開になるかもしれない。タブレット端末は縦にも横にも対応するからである。携帯のスクリーンは縦位置でメールは横書きだったが、縦書きのメールを打つような文化が生まれなともかぎらないだろう。アルファベット文化から来た情報端末が、漢字文化圏をどう引き継ぐかという問題でもある。

「ルビ」は、たとえば難しい漢字のふりがなとして、本文と並行して置かれる文字である。通常は親文字の大きさの四分の一程度のサイズで、縦書きの場合は行間の右側に、横書きの場合は行間の上に置かれる。言い換えると、日本語では行間はただの空白ではなく、ルビが振られるための補助的な機能を持つことになる。

ルビは漢字の読みだけでなく、単語の元の意味や注釈のために振られることもある。英語の行間と日本語の行間は、同じ空白のように見えても、機能的には異なっている。

このように特異なルビが日常的に使われているのは、日本語が四種類の異なる文字の混在から成っているからにほかならない。さらに日本語の文字を複雑にしているのが、普遍的なルールが存在していないという点である。漢字とひらがなの使い分けには、ほとんど無限のヴァリエーションがあると言つてよい。おおまかな傾向があるとはいえ、ある単語を漢字で書くかひらがなで書くかは、あくまで書く人の裁量にまかされている。

漢字のどこから送り仮名にするかも、書く人の方針による。日本語にもスペルチェックは存在するが、それは正しいか間違っているかよりも、文章全体のなかで統一がとれているかどうかの判断である場合が多い。¹⁰日本語の表記に、英語と同じような意味での正字法を求めることはできない。

誰もが気にすることなく書いている日本語のように見えるが、以上のような基本的な性格を考えると、これを活字として印刷するための組版にすることが、いかに複雑な作業になるかが想像されるだろう。

*インタラクション⇨相互作用。

*タイポグラフィ⇨印刷活字の書体や、配列・字配りなどの構成。

*タブレット端末⇨タッチパネルで操作する携帯用情報端末。

問一 傍線部「文字は二重の意味で限定的だ」とあるが、その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせ

よ。解答欄番号は13。

- ① 文字が本来地域的にも社会階層的にも限られた範囲で使われるべきものであること。
- ② 実は文字が言語の中でも文字言語で、しかも読み書き能力のある人にしか使えないこと。
- ③ 私たちが普段使用している日本語の文字が、文字言語である上に著しく複雑であること。
- ④ 文字社会に生きる民族学者は、無文字社会の極一部を理解し記述しているに過ぎないこと。
- ⑤ 日本語は文字を必要としたのだろうかと問うことも、これに答えることもできないこと。

問二 傍線部2「先生に叱られるかもしれない」とあるが、なぜ筆者はそのように考えるのか。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は14。

- ① 初心者が修練をする前に、理屈で文字とは何かをすぐにわかろうとしているから。
- ② 「視覚的伝達記号」という言語学の学術用語が、芸術としての書の世界には全くなじまないから。
- ③ 文字は記号であると同時にイメージであり、書はそのイメージを表現することに力を注ぐから。
- ④ 文字は記号であると同時にイメージであるが、書家は文字の記号としての側面を全く考えないから。
- ⑤ 書では文字の使用に必要な知性と感性の両方を同じ程度に磨くことが必要であるから。

問三 傍線部3「それぞれの要求に応じて形態や意味を変える」とあるが、その具体例としてふさわしくないものを次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は15。

- ① 子どもが間違った筆順で書いた文字
- ② 親鸞は漢字の読めない弟子には片仮名で手紙を書いた
- ③ 写経では楷書体で端正な文字を筆で書く
- ④ 報告書の一部で用いられたゴシック体の文字
- ⑤ 文書の署名を筆や万年筆を用いて手書きする

問四 空欄

A

B

に入れるのに最適なことばの組み合わせを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄

番号は 16。

① A 感性

B 知性

② A 商業

B 美術

③ A 芸術

B 効率

④ A 実利

B 文化

⑤ A 歴史

B 経済

問五 空欄

C

に入れるのに最適なことばを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 17。

① 変形

② 模倣

③ 訓読

④ 複雑化

⑤ 規格化

問六 傍線部4「そこには明確な限界が存在しない」をわかりやすく説明したものととして最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は18。

- ① アルファベットでは一つの単語に対して一つの表記しかできないのに対して、日本語では無限の表記が可能であり、しかもどの表記にも対応できる高い活字技術を持っていること。
- ② 印刷のためのアルファベットの文字セットは、政府がその数を限定してきた歴史があるのに対して、日本語の文字セットの数は江戸時代以来放任されていたということ。
- ③ 英語のアルファベットの文字数は二十六字であるのに対して、日本語の平仮名は四十六字と多く、しかも新しく作られた漢字から、新しい平仮名が誕生する可能性があるに常にあること。
- ④ 印刷に必要な英語のアルファベットの文字セットは二十六字であるが、日本語の文字セットは目的によつて大幅に増やすことができ、その範囲が定まっていないこと。
- ⑤ 印刷のためのアルファベットの文字セットはアルファベットだけで構成されるが、日本語の文字セットは補助漢字や記号、アルファベットなど質の異なる文字も含んでおり極めて扱いにくいこと。

問七 傍線部5「普遍的な規格が存在しない」をわかりやすく説明したものととして最適なものを①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は19。

① 単一の表記法からなるアルファベットと複数の表記法の混在する日本語の間には普遍的なルールを設けることは困難であり、今後日本語は曖昧な言語であり続けるであろうということ。

② アルファベットを使用する国々では協力して共通の表記法を作り上げたが、東アジアの漢字を使用する国々の間では、各国の事情によつて共通のルールを作るに至らなかったということ。

③ 複数の表記法の混在する日本語では、それらの表記法の使い分けについて誰もが従わなければならないルールはなく、同じことばを漢字で書いてもひらがなで書いてもかまわないということ。

④ アルファベットでは誰もが従わなければならない表記法が意識的に作り出されたが、複数の表記法を好んだ日本人は一つの表記法に絞ることを放棄し、收拾がなくなつたということ。

⑤ 異なる表記法の混在する日本語では、質の異なる活字を多数作ることが必要であるが、そのための統一的ルールが存在せず、印刷者の自由な裁量にまかされているということ。

問八 傍線部6「それとは別の歴史があるだろう」とあるが、筆者はどのような歴史を考えているのか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は20。

① 日本人のものの見方の歴史

② 写真撮影の技術の歴史

③ 出版物の電子化の歴史

④ 生物学的な進化の歴史

⑤ 人間の世界認識の歴史

問九 傍線部7「選択的になる」とあるが、筆者はこのことばをどのような意味で用いているか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 21。

- ① 批判的に世界を見ること
- ② 意識的に世界を切り取ること
- ③ 人間の限定された視界を意識すること
- ④ 無意識の好みに従うこと
- ⑤ 撮影したい風景の選択肢を増やすこと

問十 傍線部8「アルファベット文化から……という問題でもある」とあるが、筆者はこの問題をどのように感じているのか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 22。

- ① アルファベット文化とも漢字文化とも全く関係ない第三の文字文化が生まれることを夢想している。
- ② 漢字文化に対応した情報端末を、アルファベット文化とは無関係に創り出すことが急務と感じている。
- ③ 情報端末において、漢字文化はアルファベット文化を引き継ぐことは困難であると感じている。
- ④ 情報端末において、アルファベット文化が漢字文化を活かしていくことを期待している。
- ⑤ やがて漢字文化がアルファベット文化に取り込まれてしまうことに不安を感じている。

問十一 傍線部9「機能的には異なっている」とあるが、どのように異なっているのか。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は23。

- ① 英語の行間は本文を素早く伝えるためのものだが、日本語の行間は読者を立ち止まらせるものである。
- ② 英語では行間に意味を持たせないが、日本語では行間を読み込ませて文章に奥行を与える。
- ③ 英語では行間に書き込みができ情報を追加できるが、ルビの置かれた日本語ではそれができない。
- ④ 英語の行間は単なる空白であるが、日本語の行間は親文字の補助のための空間である。
- ⑤ 英語の行間には統一規格があるが、日本語の行間は印刷者の判断にまかされている。

問十二 傍線部10「日本語の表記に、英語と同じような意味での正字法を求めることはできない」とあるが、筆者はなぜそのように考えるのか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は24。

- ① 複数の表記法が許容されている日本語では、一つの正しい書き方というものが存在しないから。
- ② 複数の表記法が混在する日本語では、正字法が時代によって複雑に変化してきたから。
- ③ 異なる表記法がそれぞれの社会階層で採用された日本語では、階層ごとに正字法が決まっていたから。
- ④ 異なる表記法が並行する日本語では、書く人が正字法よりも意味を迅速に伝えることを優先したから。
- ⑤ 英語では正字法に厳格に則るが、曖昧な日本語では正字法に大まかになっっていさえすればよいから。

